

The page features three blue, 3D-rendered circles of varying sizes. The largest circle is at the bottom right, a medium one is at the top center, and a smaller one is in the middle. Thin blue lines extend from the top left and top right corners towards the circles, creating a sense of depth and design.

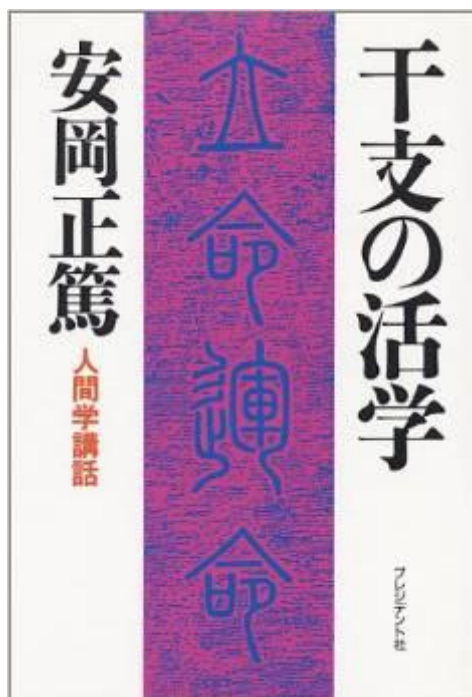
干支の活学

安岡正篤

干支は占いではなく、易の俗語でもない。それは、生命あるいはエネルギーの発生・成長・収蔵の巡回家庭を分類・約説した経験哲学ともいべきものである。

谷口 健太郎

2015/01/20



本来の干支は占いではなく、易の俗語でもない。それは、生命あるいはエネルギーの発生・成長・収蔵の巡回家庭を分類・約説した経験哲学ともいべきものである。

即ち「干」のほうは、もっぱら生命・エネルギーの内外対応の原理、つまり challenge に対する response の原理を十種類に分類したものであり、「支」の方は、生命・細胞の分裂から次第に生体を組織・構成して成長し、やがて老衰して、ご破算になって、また元の細胞・核に還る——これを十二の範疇にわけたものである。

干支は、この干と支を組み合わせてできる六十の範疇に従って、時局の意義ならびに、これに対処する自覚や覚悟というものを、幾千年の歴史と体験に徴して帰納的に解

明・啓示したものである。（「干支の活学」序文）

十干・十二支

十干に五行思考が結びついて

五行思考 木、火、土、金、水

「行」は行動の意であります。人生、自然の営む活発な作用、行動、力これが五行でこれが、兄弟(えと)に分かれて配されております。

内外エネルギーの発展段階における内外対応の状況を分類してもの。

	兄 (え)	弟 (と)
木	甲 きのと	乙 きのと
火	丙 ひのえ	丁 ひのと
土	戊 つちのえ	己 つちのと
金	庚 かのえ	辛 かのと
水	壬 みずのえ	癸 みずのと

甲・きのえ

甲はよろいで、鎧をつけた草木の芽が、その殻を破って頭を少し出したという象形文字で、これを人事に適用いたしますと、旧体制が破れて、革新の動きが始まることを意味しておる。そこでこれを実践的に考えると、この自然の機運に応じて、よろしく旧来のしきたりや陋習(ろうしゅう)を破って、革新の歩みを進めねばならぬという

ことになるわけでありませう。

乙・きのと

出した芽が、まだ外界の抵抗が強いために、真っ直ぐに伸びないで曲折しておる。乙という字は草木の芽が曲がりくねっておる象形文字です。だから、新しい改革創造の歩みを進めるけれども、まだまだ外の抵抗力が強い。しかしいかなう抵抗があっても、どんな紆余曲折をへても、それを進めてゆかねばならぬということでありませう。

丙・ひのえ

丙は乙より進んで陽気の発展した象。丙は炳（あきらか・つよし）を意味するが、文字の成り立ち＝一・冂・入が示すように、一は陽気、冂は囲い、物盛んなれば衰うる理で、陽気がすでに隠れ始めていることを意味する。

丙は一昨年、今年の陽気が一段とはっきり発展することでありませう。それが「丙」。そこで「丙は炳なり」と炳の文字をあてはめてある。あきらかとか強いかといういみでありませう。

たとえば、われわれの生命力が伸びて成長するということは、同時にこれは老衰するということに通じる。丙は今年の乙に比べて陽気が明らかに伸びるのであるが、しかしもうその時すでにこの陽気が囲いの中に入るわけで、また入れなければいけない。つまり盛んな陽気がだんだん内に入っていくことを表しておる。物は盛んな時には必ず衰える兆しを含んでおる。だから盛んになったかといって有頂天になることを教

えはもっとも愚としておるのでありませう。

丁・ひのと

丁は一と」とかからできておる。一は従来の代表的な動きがなおまだ続いておることを表し、今年の丙の上の一の続きと解してよろしい。」はその在来の勢力に対抗する新しい動きを示しておる。つまり「丁」という字は、新旧両勢力の衝突を意味しておるわけです。だから丁が在来の勢力を意味する時には、さかん豊美、壮丁などというk熟語もある。

<以下、同様に十干を読み込んでください>

十二支

たとえば「子」というのは茲という文字の下に子をつけた孳と同じで、増える、すなわち細胞が分裂・発達する能動性を表す文字であり、それがいろいろに組み合わせられてさまざまの組織・器官をつくってゆく、これが「丑」、実はいとへんの紐であります。それがぐんぐん発達するのが「寅」。寅は演・續（ながい）と同じ意味です。こうしてだんだん発達して行って、また元の細胞・核に還る、つまり「亥」になるわけでありませう。

午

午は上の自覚は地表、下の十は一陰が陽を冒して上昇する象である。すなわち、反対勢力の高まりを示す。

未

未も上の短い一と木とからなっておって、一はやはり木の上層部、すなわち枝葉の繁茂をあらわしておる、ところが枝葉が繁茂するとくらくなるから、未をくらいと読む。未は昧(くらい)に通ずる。つまり支の「未」は、暗くしてはいけない。不昧(ふまい)でなければならぬ、ということを我々に教えてくれておるのです。枝葉末節を払い落として生々たる生命を進呈させるところにある。

申

申は伸で、新しい力の進展・茶連 j 気を表します。

甲午

昨年「甲午」の年は、ちょうど春になって、新芽が古い殻から頭を出すのであるが、まだ余寒が厳しくて、勢いよくその芽を伸ばすことができないと同じように、旧体制の殻を破って、革新の歩を進めなければならぬのであるが、そこにはいろいろの抵抗や妨害があるために、その困難と闘う努力をしながら、慎重に伸びてゆかねばならぬということでもあります。

つまり革新的歩みを進めるに当っての外界の妨害や抵抗、それとの交渉、動揺を表している。したがってこれは、自然の機運と共に、人間の使命・実践の問題であります。大いに指導者の「胆識」が問われる年なのです。

乙未

「乙」の語源は乙形の骨ペラで、糸の乱れを解く道具の象形で、「乱」をおさめると読

む根拠となる字であるといわれる。

許(きょ)慎(しん)の「説文解字」に「春に草木、婉曲(えんきょく)(まがること)して出ずるも、陰気なお強く、その出ずること乙(いつ)乙(いつ)(でにくいさま)たるを象る」と説明している。つまり春の初め、草木の芽が甲鱗を破って出かかるのであるが、寒気がお強く、真直ぐに伸びかねて、曲がりくねった形になっている。その芽の象形と見たのである。

一方、支の「未」は、分解すれば一と木で、一は木の上部・枝葉の繁茂を表す。枝葉が茂ると暗くなるから未は昧(まい)に通ずる。そこで「未」は、暗い事を排して明るくしてゆかなければならない。不昧(ふまい)にしなければいけない。

不昧(くらまさず)と言う語は広く普及して、雲州松平公が「不昧」と号し茶道に「不昧流」という流派を生じている。

そうしてみると今年の「乙未」は、いかに下界の抵抗が強くとも、それに屈せずに、弾力的に、諸事、筋を通して、曖昧や暗いことを排し明るくしてゆかなければならぬ、不昧にもってゆかねばならぬ。と言うことを意味しておるわけでもあります。